

# 母塾

VOI-31

2019-12-17



新小岩幼稚園・未就園児クラス

illustrated by Kurumi

## 『配達か 旅か』

アドバイザー 猪之鼻晴子

5年間乗った電動自転車がいよいよ壊れてしまったので新しい自転車にした。  
これで6人乗せて4台目になる。車の免許を持っていないので、自転車は毎日のパートナーだ。  
前に後ろにおんぶで4人乗りをしていた時はたぶん重量オーバーの交通違反だったと思う。  
女子高生に「すごい！サーカスみたい。」と言われた。あの女子高生もママになっているだろうか。  
3台目も、雨の日も強風の日も5年間ロクを乗せて一緒に走ってくれた。子育てのパートナー。  
5年間どれくらい走ったのだろう、と考えてみた。一日に30km走る日もある。  
小松川から錦糸町・大島・葛西は週に何回か走る。スカイツリーも葛西臨海公園も自転車で行く。  
お兄ちゃんの野球の応援は市川の河川敷まで行く。上野動物園も自転車で行って見た。  
「イノハナさん、小松川橋渡っていたでしょう。」とバスの中から見た人によく言われる。  
「イノハナさん、今井街道走っていたでしょう。」とも何人かから言われる。  
とにかく、毎日どこかを自転車でぐるぐるしているような気がする。  
約350日×平均10km×5年 = 1万7,500km。東京からブラジルまでの距離を走った。

10年前まで新小岩幼稚園の講師でお母さん方の勉強会もしてくださった久保田 浩先生は  
とても子どもたちに温かく、それゆえにお母さん方には時に厳しいお話をされた。  
「お母さんたち、自転車にひょいと乗せて子どもを配達しているんでしょ。」  
先生は「手をつないでゆったりと子どもとおしゃべりしながら歩くものでしょう。」というご主義。  
子どもを荷物のように扱ってはいけない。幼稚園にポイと置いていってはいけない。  
宅急便のように子どもを配達しているのではないでしょう。ということなのだ。  
先生のお話が今でもずっと響いている。「配達じゃないでしょう。」  
だから、子どもを自転車に乗せるたびにちょっと罪悪感もある。  
「先生、でも江戸川で子育てするには自転車は必需品なんです。」とは言えなかった。  
大きな荷物と子どもを乗せて毎日走ってしまっている。

本当はゆったりと時間を取って手をつないで歩けばいいのだけれど、時間を省いている。  
その代わりに子どもを「配達」じゃなく、旅に連れて行こうと思う。  
「早く乗っちゃって。」と急かすのではなく、「出発！」と走り出そう。  
子どもを乗せて走るのは何年間でもない。  
松江小学校では5年生までひとりで自転車に乗ることが許可されていない。  
5番目四男は40キロになった5年生までよく後ろに乗っていた。  
その子も今では当たり前のように自転車で河川敷のグラウンドに行っている。  
子どもの声を後ろに聞きながら走る時間はそんなに長くは続かないのだ。  
風の音にかき消されながら、大声で子どもに話しかける。  
「ママ、しりとりにしようよ。」と言葉を探しながら暑い陽の中走る。  
「ママ、ウルトラマンの歌うたって。」と合唱しながら合羽を着て走る。  
「ママ、カモが見えるよ。」と川を見下ろしながら橋を渡る。  
毎日が子どもとの小さな旅なのだと思う。  
毎日小さな旅を一緒に続けている。  
ブラジルまで行かれるような距離をまたこれからの5年で走るだろう。  
「先生、配達じゃなく、旅をしています。」と亡き先生に言い訳している。

harukoinohana1717@gmail.com